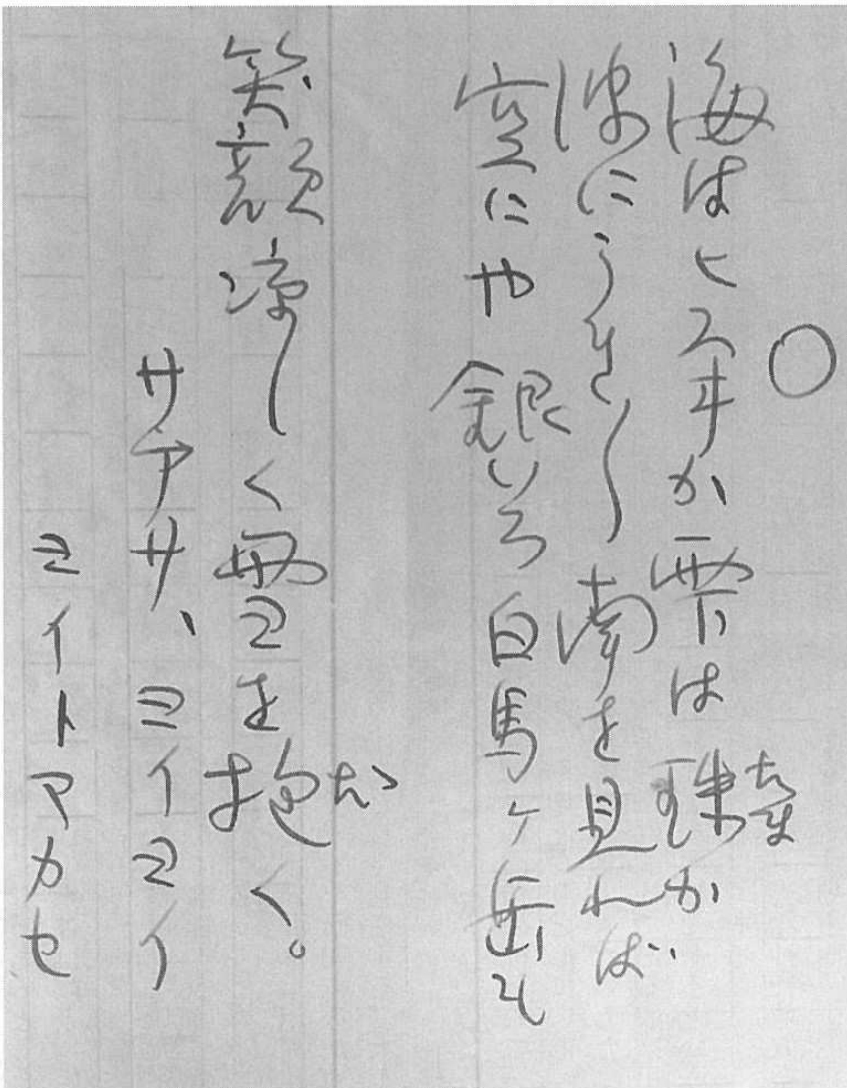


生心

せんしん

28号 2018年5月8日



一の宮と相馬御風

松野 功

相馬御風は、ふるさと糸魚川に還つて間もない、大正七年三月糸魚川町史編さん委員長に推薦される。副委員長に木島藤兵衛、委員に中村又七郎、小林鹿郎、相談役に糸魚川中学校長徳谷豊之助らの名がある。会は向う三カ年内とあり、大正十年四月『天津神社並奴奈川神社』が発行されていることからこの委員会設置の背景には、天津神社の県社への昇格の願いがあつたようだ。

明治新政府になると神社の格付が重視され各地でその運動が起つた。天津神社の場合は明治十六年十二月に村社に、大正七年二月一日には郷社に昇格していた。

三十五歳の相馬御風には学識はあつても帰つて来たばかりで糸魚川の郷土史に詳しい訳ではなかつたが地元の期待は大きかつた。

幸いに恩師である中川直賢が糸魚川・西頸城の歴史がわかる郷土史料を発行していた。

中川は、元は県の土木技術職員であつて親不知の新道開さくの設計測量をしたことで横町の県会議員寺崎至と親しく、寺崎は小谷と糸魚川を結ぶ馬車道、今の国道一四八号線を開きくする工事の設計測量のために中川を糸魚川小学校の訓導として糸魚川に迎えた。

中川は工事が終わつても糸魚川に残つて西頸城の教育改革を次々と行ない、その中に自然研究、郷土史研究があつた。そして郷土史

料一輯から三輯までを刊行した。糸魚川小学校を経て糸魚川町長に就任した。教え子に相馬御風、中村又七郎、木島友吉(後の藤兵衛)らがいた。

大正六年一月、糸魚川町長の中川直賢は糸魚川小学校で行われた糸魚川町少年修養会の講演中に脳出血で突然倒れた。ちょうどこの時、帰郷したばかりの相馬御風は来賓として臨席していた。

糸魚川市の郷土史研究は、中川直賢から相馬御風、木島藤兵衛に、そして青木重孝に継がれていく。

倉又市朗の昭和十一年五月一日発行の月刊新聞「糸魚川便り」に相馬御風の「天津神社並奴奈川神社に就て(一)」がある。それに「これは先年私が糸魚川町々史編纂委員として調査編纂した「天津神社記」並に「奴奈川姫命並奴奈川神社考」の二編に基づいてお話しするのである。」と記されている。先の「糸魚川便り」によれば、町史編纂は相馬御風が上古中古を、木島藤兵衛が近古以後を分担したとある。このことから『天津神社並奴奈川神社』の執筆が御風によるものであつたといえる。

頸城郡に式内社が十三座あつてその中に奴奈川神社が入っているが、この神社が今のどの神社がそれであるかわからない、論社となつているのである。

一の宮の氏子達は、明治十七年七月十六日天津神社に隣接する柳田神社を奴奈川神社と改称したのである。つまり一の宮は天津神社

と奴奈川神社でなるものとした。

奴奈川神社の祭神は奴奈川姫であることから、この姫が中央文献古事記に登場するので御風も早くから注目していた。

これを最初に論じたのは、徳谷豊之助で松江市に生れ、東京帝国大学哲学科を出て、明治四十四年高田新聞に「沼河比賣に就て」を書いて、姫を研究するために糸魚川中学校の校長として赴任する。大正九年『西頸城郡郷土史料第七輯』の「大国主命と沼河姫」で様々な中央文献と地元の資料を駆使して、沼河姫は本郡開拓の神として一日も忘るべからざるものとなりとしている。古事記に載る奴奈川姫は当地の人だとした。

相馬御風は論社である奴奈川神を一の宮にある神社が式内社であるということの仕事を担当されたわけである。

相馬御風の『天津神社並奴奈川神社』の文章を要約すると

一、天津神社は式内社頸城郡十三座の中にその名がないことから先に奴奈川神社があつた。

二、天津神社の祭神は、伊勢外宮の相殿の神であつて、村は上杉時代、徳川時代から伊勢外宮の領地であつたことから、別当の神宮寺は自然と天皇系の天津神の天津神社を主とし地元の神の奴奈川神社を別扱いにした。

三、地元に残る奴奈川姫伝説十三をあげ、町の周辺には大国主命並に奴奈川姫との

史跡といかに密接の関係が深いかわかる。四、神社所在「一の宮」地名について

神社の所在地は、大字一の宮字一の宮である。附近に一の宮村、清崎、姫御前縄手、笛吹田、神楽田、奴奈川の池などの歴史的地名がある。文献上から一之宮地名は糸魚川の地名より遙かに古く、この一の宮は古への久比岐の一之宮である。

五、奴奈川神社祭祀の古例

春期大祭に舞楽が奉納される。鎌倉時代の古面もあって神社の由緒がわかる。舞楽中に行なわれる詩歌応答の行事は、古事記にある大国主命と奴奈川姫とが交わした贈答歌を思わせ何等かの関係があると考えられる。

六、奴奈川神社附近の古代人遺跡

境内に桜を植えようと掘ったら、あまたの土器と石器が出土。これを東京帝国博物館学芸員で考古学会幹事の高橋健自に鑑定を依頼した。土器は弥生式土器、石器は滑石制「石制品」と判り、全体の資料から古墳があったと想うが実地踏査が必要とした。御風達は高橋に発掘調査を依頼。現地は広く一部を掘って保存となり、高橋は、現地はかつて古墳であったがならされしていると報告。御風は考古学の手法で歴史を説明しようとして、奴奈川神社は上古より連綿としてあった神社と推定したのも必ずしも牽強附会の憶説でないとした。

七、奴奈川神社の神像

高橋健自らの鑑定によれば平安時代の制作で、美術上の価値においても最も優秀で、奴奈川姫の木像とされた。

このような本が出版されたが、神社は大幅に遅れて、昭和十六年天津神社として県社に昇格した。

相馬御風は、その後も奴奈川姫の痕跡を探していたらしく、昭和十三年の身辺雑記に「六月五日私はK(倉若)を伴って糸魚川町地内の田圃中から沢山の弥生式土器や祝部土器の破片の出たという場所を見に出かけた。一略―広い田中の一とところ、立派に耕地整理が出来てあるにも拘らず、どこから見ても著しく小高い田があった。土器の出たのはそこであった。一略―そこへ田の水を見回りに来た老人によりて、そのあたりの字名が神楽田、笛吹田、姫御前等であることを知り得た。私の興味は一段と加はった。」とあって、今の東小グラウンドの東側周辺が奴奈川姫の墓ではないかと目論んだようだ。



西頸城郡史料展覧会に出品された女神像(奴奈川姫像)

市嶋春城「続良寛さま」を

読む」紹介

蛭子 健治

昭和十年六月一日、御風は装幀、口絵郷倉千朝、挿絵島田訥郎により良寛の六十三の逸話を収めた『続良寛さま』を実業之日本社から出版する。実は五年前同じく子供向きに三十五編の良寛逸話と、十二編の御風作の良寛童謡、九十九首の良寛の歌を掲載した『良寛さま』を出版している。

正編に続く、子供向良寛逸話の姉妹編といえよう。

縁あって大隈と共に早稲田学園の創設に力を尽くし御風とも交流を持った越後水原出身の市嶋春城が、昭和十一年三月出版の随筆集『擁炉漫筆』に発表している「『続良寛さま』を読む」の一編の抄出の提供を受ける。以下この春城の『続良寛さま』を読む」の書評を紹介しておこう。

幼少の頃家で良寛の逸話を聞かされていたので思い出も深く、一読頗る興成を覚えた。逸話の多い人として大雅堂が上げられるが、良寛師は大雅堂より一枚上かも知れぬとの冒頭一節の主意である。長いが次に続けよう。

良寛師の主なる言行は既に正篇に収められ、続篇には其こぼれが拾ひ上げられてある。

この落ちこぼれ所謂昆岡の遺珠で貴い材

料ではあるが、まだ磨きのかからないものである。それが幸ひに良寛研究の第一人者に拾ひ上げられ、丁寧に磨かれたから、だんく燦爛たる光を發揮するに至つた。自分などの感服するのは、行文の温藉秀麗であるのは言ふまでもないが、殊に喜ぶのは良寛師の心持が、どの篇にもありくと現れてゐることだ。

師の事とし云へば、何から何まで頭にある著者の執筆に係るから、一点附会らしいことがなく、又無理な敷衍と思はるゝ所が微塵もなく、如何にも素直に師の心事を描して、宛がら師自身の語るを聴くの思ひあらしむるのは、著者の老腕に依るのである。著者は又往々、韻文を交へて師の情緒を叙してゐるが、これも亦著者独特のもので、他人の追隨を許さない。著者は、僅かに一行の遺簡や、口任せの和歌俳句にまで、其由来を註して一佳話となしてゐて、どれを讀んで見ても興味に陶酔する。

軽々に読み来れば、平澹なるお伽噺に似てゐるが、仔細に味へば、天真流露の挿話に哲人の至理が寓されてゐて、名僧を敬慕せしむるものがある。而も著者は、一切理窟を抜きにして、読者の判断に委してゐる所に余韻があり、自分が兼て著者の老腕に服するのは、専ら此点に存する。

良寛師の重なる事跡を収めた本篇は、何かと云へば寧ろ叙し易く、此続篇は叙することが甚だ難い。著者が長年研究を積み、

筆が老熟の域に達したればこそ、此成功を見たと自分は考へる。この続篇は本篇に比して、優るとも決して劣るものでない。実を云へば、本篇にある事跡は御風氏を煩はさずとも伝はるであらうが、続篇の零碎の瑣事は、御風氏ならではの其神を伝へ得べしとは思はれない。私は、吾郷国の名僧の爲め、重ね重ね好著の出したのを喜ぶ。(了)



『続良寛さま』左が本体、右が函

御風と春城

御風は、早稲田大学卒業後、島村抱月のもと「早稲田大学」の編集に中心にかかわる。春城は、同誌に「馬琴の遺墨」「早稲田大学図書展覧会」「講義録に関する展覧」等執筆して

いる。

御風は大正五年一家を挙げて糸魚川へ退住、中央文壇から離れても、お互いの文学論や随筆等を賛辞、評価し合っている。御風は「春城翁の『文学余談』と題する随筆集は啓蒙されるどころ多く、かつ直接お逢いしているような親しさを以て讀んだ。中に拙著『馬鹿一百人』を推奨していただいている一篇があるが少々恐縮気味であつた(「野を歩む者」とし、春城も、随筆で「御風の『馬鹿一百人』を讀む」「文墨余談」「続良寛さま」を讀む)」「擁炉漫筆)」「御風氏の隨筆について」「(鯨肝録)」等、高く評価している。

この稿は阿賀野市水原の「春城の隨筆を讀む会」蛭子峯雄世話人(稲門会員)筆者の実弟より提供の資料によるものであることを付記しておこう。

他に

春城より御風宛書簡(六点)

大正十一年一月十九日 封書

昭和七年七月十二日 封書

昭和九年三月二十日 封書

昭和十年十一月五日 封書

昭和十四年三月二十一日 封書

年不明 一月七日 封書

右書簡はいずれも東京市牛込 東五軒町三十五 市嶋謙吉より、新潟県西頸城郡糸魚川町 相馬御風(昌治)に宛てたもので、現在、糸魚川歴史民俗資料館が所蔵している。

かつせん ぎよふう ゆきひこ たいせつ もくほう
串川・御風・鞞彦・耐雪・沐芳

細井昌文

去年、糸高一〇周年記念誌「亀陵」に、旧制糸魚川中学校六代校長山崎良平（号串川）先生のことを書かせていただいた。編集部より二冊お送り下さり、今から二十六年前、「漱石の読んだ良寛詩集の発見」を書いた際先生の御長男、鉄男氏に御教示いただいたこともあることから、一冊是非お届けしたいと思ひ、古い住所録に記された電話番号にかけてみた。

幸い電話はつながり、鉄男氏は亡くなられ良平先生の孫にあたる文彦氏とお話し出来、後日、さいたま市宮原にお訪ね致し、旧交を温めた。この際、漱石から良平先生に送られた「僧良寛詩集」の礼状を見せていただいた。

大正三年一月十八日午込区早稲田七番地より新潟県糸魚川山崎良平へ「拝啓良寛詩集一部送被下正に落手仕候御厚意深く奉謝候上人の詩はまことに高きものにて古来の詩人中其たぐいなきものと被存候へども平仄などはまるで頓着なきものと被存候が如何にや然し斯道にくらき小生故しかと致した事は解らず候へば日本人として小生は只今其の字句の妙を諷誦して満足致候上人の書は御地にも珍らしかるべく時々市場に出ても小生等には如何とも致しかるべきかと存候へども若し相当

の大きさの軸物でも有之自分に敵当な代価なら買求め度と存候間御心掛願度右御礼旁願迄勿。

一月十七日

夏目金之助

当時の山崎先生の住所は糸魚川鉄炮十四番地。明治三十六年漱石が英国留学から帰って一高、東大の講師に就任した時、山崎は一高の二年生であり、英語の授業を受けた。同年五月二十二日、同級生藤村操が日光華厳の滝での哲学的自殺をはかった。この事件に動揺した良平は、一高校友会雑誌一三〇号に「大愚良寛」を発表、良寛の生涯を紹介し、文芸部委員に選ばれた。御風は大正七年「大愚良寛」に「山崎氏の此の評論は最初明治三十七年、八年の第一高等学校友会雑誌に掲げられ後に小林二郎編集の『僧良寛詩集』四版の巻尾に転載された、かなりの長論稿で、近代的批評の題目として良寛の生活及び芸術の取扱はれたのは、恐らくこれが初だと思ふ。」と書いている。

この四版に初めて良寛の書三葉が紹介され、漱石はこれを見て心動かされ入手したくなったのであった。御風はまた「私が良寛和尚の生活と芸術との研究にとりかかったのは、もともと私一個の為めの仕事に過ぎなかったのであるが、その成果の一端を斯うして文章に綴って世間へ出すようになったのは、主として松木徳聚（糸中五代校長）、山崎良平二氏の懇切なる勸奨と指導と鞭達とのたまもので

ある。私は今謹んで此の貧しい一巻を両氏に献ずることによって私の感謝の意を表する次第である。」と述懐している。

そして御風は画家安田鞞彦氏に献本。大正七年七月十日の氏の礼状に「此度は高著大愚良寛壹部惠贈を忝うし難有深謝候未だ拝眉の榮を得ず候へ共兼てより良寛和尚の御研究に就ては多大の感謝の念禁じがたく私に敬慕罷在候」とある。氏によれば「大正元年の春だったとおもふ。越後の加茂の関といふ老人が来られた時、偶々長歌を書いた一巻を見せて万葉仮名のほのぼのとした高古とも言える美しさに打たれた。それが良寛の書であった。」氏の二十八才の時であったという。

加藤僖一先生は、「良寛の書を一目見て、瞬時に惚れこんでしまった人を二人だけあげるとすれば、夏目漱石と安田鞞彦であろう」と云っている。

大正七年十一月六日の鞞彦氏の礼状は「久しくまぼろしに描き居候国上山のみじ葉はことに懐かしき限りに御座候又良寛和尚のよき画像の写真たまわり候事上なき仕合に有之候 肖像は一つにても多く見度切望致居候」そして十二月十二日には「佐藤吉太郎氏より結構なる品々たまわり申候。いろいろ貴大の御配慮を辱うし候」とあり、御風は良寛寺を夢みる耐雪に安田画伯を紹介されたに違いない。そして耐雪はおみやげを持って安田家を訪問。

「ことに以南老の筆跡は句も書も普通俳人と

は異り大いに以南の性格の現はれたるものと珍重致候、かの野分の句に先日たまはり候国上山の紅葉をそえて額にはさみ眺め居候。」氏の心はずでに越後にあつた。翌大正八年四月二十七日、御風に宛てて「小生此程良寛和尚の遺跡詣での旅心がけ居候事御耳に達し細々御注意たまわりのみならず其の節は親しく御東道さへ辱うすべく仰越被下欣悦たとへむもの無之深く／＼感佩仕候」と知らせている。

靱彦は少年時代より身体が弱く二十代半ばで結核に罹り、美術学校の先輩であつた相原寛太郎(号沐芳)は修善寺新井旅館の跡取り娘と結婚し三代目館主となり、靱彦を修善寺に転地させ手厚く療養させ義兄弟の仲であつた。

大正八年、靱彦三十五才、新婚旅行を兼ねて良寛遺跡を巡る事にしたが仕事の都合や体調のことを考えるとなかなか日程が定まらなかつた。四月二十七日、御風へ「五合庵の前に尊大と共に立つべきときを想い候へば胸とどろき候。」と伝え、ついに六月二十九日から七月三日まで、前にも後にもただ一度の探訪であつた。

大正八年七月十日、「此度は一方ならざる御懇情に浴し奉感佩候宿願成就只々欣悦を申上候外無之候。」大正八年七月三十日の書簡の末尾に、「歌もこころみ居候へ共何分にも前記の次第にてまとまり不申候へ共不日御査閲を仰ぎ度存居候。」

- ・ 荒海はさわがざりせば河豚の子らおよびなごきに佐渡が島見ゆ(出雲崎十首から)
- ・ この庵の杉の下蔭一本のつりがね草はたをりかねつも(国上山にて六首から)
- ・ おほいなるむかしの人の前に立つこのうつそみのかすかなるはや(良寛墓前にて)



国上山五合庵にて
左端から御風、靱彦妻、靱彦
(大正8年7月1日撮影)

大正八年八月十日 相州箱根庭倉にて

「独り静かに御著大愚良寛や詩歌集を読みふけり居候 この度の拙作五合庵の生活の一端をかいて見度試み候。山陰の雪も解けて桃の花などふくらみ木の芽めくむ頃をかきたく候。女の子が二人ほど訪ねてくる処を描き候。」それにつき女兒の服装等を問い合せている。翌秋第七回院展に出品、この作品「五合庵の春」の小下絵は記念に御風に贈られた。

画伯は建築にも興味があり、新井旅館に天平風呂を造る計画があり、台湾の阿里山の檜がすでに準備されていた。大正九年耐雪は良

寛堂の設計を靱彦に託する。沐芳はその檜を半分の値段で分けてもらえることになった。また靱彦は百余人の画家に絵の寄贈を求め、それを売り建築費にと協力。まさしく良寛顕彰の大恩人であつた。

良寛堂建立八十周年記念の二〇〇二年、耐雪の孫反町タカ子氏は、雑誌「良寛」四十二号から最終の五十号まで、耐雪の日記「用留」から良寛堂完成までの記事を抜き出し「良寛堂建立」を十回連載された。御風と靱彦画伯の出合いは、なんと充実していたことか。

『相馬御風書簡集』上・下の出版 “家族への書簡”について

金子 善八郎

市教育委員会は、平成十四年から平成二十二年までに『相馬御風宛書簡集』四巻を発刊した。この度の『相馬御風書簡集』上・下は、それに対応するものである。

普通、書簡集は、本人の書簡集を纏めるのが先であるが、御風の場合「宛書簡集」の方が先になった。これは、所蔵している著名人の沢山の御風宛書簡を、早く市民や研究者に公開したかったからである。

また、書簡は普通、発信者と受信者が、それぞれ対応しているものであるが、今回の書簡集と、先に出版した宛書簡集は、残念なが

ら対応していない。発信先に保存されていたものはごく一部で、その量も時期も、宛書簡とは大きく異なっている。かろうじて巻頭の会津八一との交信が対応しているといえはいえる程度であり、もつともよく対応している鳥井儀輔宛て書簡は、予算の関係で次の「補遺」に回さざるを得なかった。

上巻は「家族への書簡」。同じ家族で有りながら収載は、極端に偏っている。まず、長男昌允の書簡が収載されていない。徳治郎書簡も一通しかない。これは明治以降の度重なる火災で焼失してしまったものと考えられる。二男皓への書簡は、五通。それも昭和十五年七月から、翌昭和十六年十一月までの、ほぼ一年半のものに限られる。

当時皓は、上京して兄昌允の家に同居して「大日本警防協会」の「警防史」の編纂に携わっていた。担当したのは、「警防文化史」でここでの仕事は、後のNHKの大河ドラマの時代考証に生かされた。

書簡の中身は、離婚後の生活を建てなおすための父親の注意助言。「雨後晴を期して大いに元氣を出し、現状打破に努めるやう望む」と。

徳治郎、昌允宛て書簡に比べて文子宛て書簡は二百六十六通と極端に多い。発信時期も文子が大学に入学した当初から、御風が亡くなるまで十三年間の長年にわたっている。月平均三、四通、多い時は五通、毎週という月も少なくない。

内容は多岐にわたっている。中でも一番目につくのは、「送金」のことで、殆どの手紙は「金」のことに触れている。

また、結婚の話など、文子自身の履歴に関することはもちろん、恩師や先輩の墓参りなど、田舎にいる御風の代わりを務めたことなども書かれている。そして、この沢山の書簡は、日記を残さなかった御風の行動記録のような面も持っている。

二

今回は、紙幅の関係で妻テル宛て書簡のみを取り上げることとする。

収載されているテル宛て書簡は二十八通。その内二十通は封書、八通は葉書(絵葉書)他に封筒のないもの四通。

時期は、大正五年春、テルが三男元雄を出産するため、田舎(糸魚川の御風宅)へ帰った時、一人東京に残った御風が、テルに宛てたもので、大正四年五月四日付から、大正四年十月二十七日付までの書簡。五月三通、七月五通、九月四通、十月六通、と、一番多い月は三日ごとに発信している。

発信地は、東京小石川区高田老松町四十三田中方、と小石川区小日向水道町六十一 早稲田文学編輯所からのものが大部分である。当時御風は、教え子の田中純の家で生活していたのでその住所と、勤務先からの発信ということになる。

糸魚川に帰ったテル宛て書簡五月四日付け

は、「その後変りありませんか、毎日案じ暮して居ります」と田舎暮らしを案じてのもの、そして「小チャボの病氣はどうでした。チャボを井戸へ近づけないよう注意してください。井戸の事が気になつて仕方ありません、それから湯もなるべく家でたてるやうにお父さんに頼んでください。」チャボは昌允のアド名子供が事故を起こさないように心配する。

それから金のこと。「金を二十五円だけおくりませぬ。そのうち金が手に入るに随て少しづつでも随時送る事にするつもりです」。このような「金」のことに関する記述は、その後の書簡にも続いている。五月六日付「金十五円手に入つたから送ります。遊んで居た割合に金が入つたのでさうまごつきませぬでした」これは送金要請のこと。五月二十五日付け「金が入つたから五十円送る。月末の工合でまだ少しは送れるかも知れないが、もし出来なかつたらば今月はこれで御免をかむむる。」七月十五日付け「帰りは二十五日頃までのばしたいと思ふ。少しばかり金を手に入れて帰りたいと思ふからだ。」十月十三日付け「でも働くことは働いて居る。働いて働いて働きぬくのだ。おかげで先月八百円ほどの金を残した。十月二十三日付け「金ハ貯金を引き出して使ふ事にして置いてハ如何、その方が世話がなくて好いのではないか、こちらにも用意して置く必要があると思ふからね。」

苦しい家計を遣り繰りしていたことは一目瞭然、「定収入」のない自由業の家計というも

の遣り繰りの様子がよく分かる。

次に目を引くのは、はじめの五月四日付けの書簡「今日警視庁と博文館に用があつて下町へ行つて見たが、しばらく田舎へ行つて居ただけなのに、もう東京はすっかりうるさい、せせこましい、いやな所と云ふ感じがします。」という記述。

警視庁と博文館にどんな用があつたのかがよく分からない。それに警視庁と博文館の「用」と、「東京はくいやな所だ」という文が繋がっているのかどうか、気になる所である。また、この「用」が五か月後の早稲田文学の「発売禁止処分」と関係しているのかどうか。場合によればその「警告」だったのかも知れない。

九月十一日、テルは第三子元雄を無事出産したが、産後の肥立ちが悪く、足がしびれて立つことが出来なかつた。そのため「どうか一日も早く足が立つやうにそればかり祈つて居る。」という御風の願いもむなしく直ぐには帰郷することが出来なかつた。

ようやく十月中旬、立つて歩くことが出来るようになった。御風は「足が立つて、こんなにうれしひ思ひへ最近におぼえない、胸がどきどきする、手がわなわなする、もう大丈夫だ。うれしいうれしい」と喜んで借家探しに力をいれる。

九月十九日付け「ちヨイちヨイ借家札が見える。」九月二十六日付け「家が至極好いのが二軒ある。眺望絶佳、間敷ハ五間、二階八、下八、六、三、湯殿、物置付。家賃十七円。」

そして十月二十三日付け「大奮発して、てるさんのために夜具と蒲団とを拵へる事にして目下早稲田文学社のばあさんに縫つて貰つて居る、新婚のつもりで来るが好い、新しい鏡台!!新しい寝具!!新しい釜!!」。若者のように高揚したこの気持ち、五か月後に故郷へ退住した人の言葉とは、俄かに信じがたいほどである。

しかし、そのことを念頭に読み返してみると、そこには「退住の心境」と考えられる記述もいくつか見受けられる。

六月三日付け「お父さんの元氣の出たは何よりの事」「先日の手紙にあつたやうにお父さんが糸魚川に住む方が好いと云はれるならばその方が好かるうかと思ふ」七月六日付け「おじいちゃんはじめ皆の丈夫そうな顔を見てきたのは何よりうれしかった。」―祖父の気持ちや付度して田舎暮らしの好きを匂わせる。

そして七月二十一日付け「東京は病人が多くていやだ。」九月からは田舎に居るやうな気持ちでしんみりした家庭生活を味はうようにしたいものからいろいろ考へて居る」。

九月十九日付け「久しぶりで来て見ると東京の町は狭くなるしく、せせこましくて神経を勞する事おびたらしい」。

九月二十七日付け「大久保の姉さんもこの頃ハおひおひ東京の生活がたまらなくなつたと見えて、日下さんに向かつて東京に永く居ればヒステリーにな

つてしまふと云つてはこぼして居ると話して居なすつた。てるさんの話をしたらば『そんな事なら猶更田舎の方が好い、東京だつたらさぞ大変でしたらう』と云つて居なすつた。まったくさうかも知れない。僕に至つては猶更だ、この頃はわけても東京の生活の煩はしさが苦しくてやり切れない」。

三

通して見ると、一方で田舎の妻を迎えることを喜び、新しい東京生活の楽しみを述べながら、他方で、東京の生活を嫌悪し、田舎の生活に憧れている。気持ちが揺れ、分裂している。数か月後、この揺れる気持ちがどういうことで「退住」に決着したのか。

その謎を解く鍵がこの田舎のテルに宛てた御風書簡に隠されているように思う。



右から皓、文子、昌允

飛行詩人佐藤章と糸魚川町

神 正 喜

一 はじめに

「糸魚川町史年表」の大正六(一九一七)年八月十九日の記事に「帝国飛行協会の飛行機初飛来 寺町浜に着陸す 近郷より見物客来り 町雑踏す」というものがある。糸魚川の近代史を調べるなかで気になっていた。

帝国飛行協会は現在の一般社団法人日本航空協会のルーツであり、民間主導による航空振興を活動目的として大正二(一九一三)年に創立した組織である。

筆者は最近、『飛行詩人佐藤章』(赤川菊村編 アキラ会発行 一九三〇)以下『飛行詩人』と略す)という五百冊限定発行の稀少本を古本屋から入手した。これにより、寺町浜への飛行機飛来の件の全貌、また、御風が深く関わっていたことが明らかになったので、ここに記しておく。

二 書籍をめぐる往復書簡

まずは、その発刊経緯や佐藤と御風との関係を簡潔に示す往復書簡を紹介する。

秋田県大曲町(現在の大仙市)の地方新聞編集者である赤川菊村(源一郎)から御風に宛てられた書簡である。

(昭和五年一月十五日付け)

拝啓 甚だ突然であります私には中村星湖

君の古い友人であります。ながらく東京で記者生活をしてゐましたが昨年父を喪ひ郷里秋田県大曲町に帰つて参りました。なほ一年ばかりいろ／＼の整理かた／＼滞郷して居るものであります。

あなた様のよく御存じであるところの飛行家、佐藤章君、渠れは私の後輩ですが生家は私の二階から田圃を隔て、見ゆる処にある様な関係から昔からよく知つて居ります。それで渠れが大正十年秋田号をつくる時にも私や日々新の小野賢一郎君までが主となりて運動のくちびを裁つたやうな次第でした。そんなことから渠れの徹父菰渚翁(漢詩人で富豪です)から「佐藤章伝」をまとめてくれと希はれまして只今脱稿しかけて居ります。新聞記事や章君の日記などによりてあなた様が並々ならず章君を庇護して下さつた顛末がよくわかります。又、二通の御書面も唯今私の手許に廻つて来て居ります。

渠れと北陸とは非常に縁故があり、邦子未亡人は一粒種の^{アキ}章子さん(本年十歳)と落つて新潟に生活して居ります。糸魚川町から送られた記念品も拝見しました。

来る廿日頃に脱稿、装幀は平福百穂君に頼み、組も東京でやるべく月末には上京します。誠に恐縮ですけれども北陸の国土山川を代表して下さつて渠れのために若干のことばをかけていたゞければ望外の幸福に存じます。

四六版四百頁位のものになります。故人はなか／＼文筆が巧者で、この方でも立派にたべて行けるのでした。詩も歌もチヨイ／＼あります。これらは成本の上にて御読下さいませ。おそれいりまするが、いろ／＼の事情が判明してみると、あなた様にだまつてをることが反つて失礼にあたるやうな気がいたしました。ツイ斯様な失礼極まるお手筈を差上げる事と相成りました。無類の悪筆です。何卒御判読下さいませ。

拝具

(糸魚川歴史民俗資料館蔵)

これに対する御風の返信が『飛行詩人』に収録されている。

(昭和五年一月十七日付け)

御手紙拝見、おもひもかけず故佐藤章君のことを承はり、しみ／＼と追懐に耽つて居ります。伝記御編纂、御刊行の由、まことにありがたくよろこばしい事に思ひます。故人もさぞかし地下でよろこぶことでせう。一日も早く拝見したい思ひが致します。全く惜しい人でした。日本にも一人くらゐ空の詩人があつていゝ、それを私は同君に期待してゐたのでした。機体に故障を生じた為、故人は私達の町に幾日も滞在しました。その間毎日逢つていろ／＼な話をしました。あの頃の事を私は時々おもひ出します。いかにもなつかしみのある人でした。(以下略)

三 佐藤と御風(一)

佐藤章は本名を要蔵といい、明治二十七年(一八九四)年に秋田県金沢西根村(現在の美郷町)で生まれ、大正十(一九二一)年に二十七歳で没している。早稲田大学理工科予科に学び(中退)、帝国飛行協会に所属、黎明期の日本航空界において民間飛行士として活躍した人物であり、かつ詩や歌をよくしたように、親しい間柄の小野撫子(賢一郎)らから飛行詩人と称されたという。最後は飛行機の墜落で命を落とした。

御風は前述の往復書簡後、初期の「野を歩む者」に次のように記している。

○第1号(昭和五年十月十五日発行)

「随感随想」より

後藤章(※佐藤の誤り)といふ飛行家があつた。

「ずるぶん危険な仕事だね。」

といふ私の間に答へて彼は云つた。

「なあに、汽車に乗つてより安心ですよ。自分の命を自分で預つてるんですから。」

そんなことを私と云ひ合つてから、間もなく彼は墜落して惨死をとげた。

彼は一方にいゝ素質の詩人であつたが惜しいことをした。先頃彼の遺稿が編纂されてゐるといふ話を聞いたがまだ出ないやうだ。

○第3号(昭和五年十二月十五日発行)

「身辺雑記」より

待ちに待つた飛行詩人佐藤章の伝記と遺

稿とが漸く刊行されて送られて来た。おもへば、開闢以来初めて私達の町の空に飛行機の飛んで来たのは大正六年八月十九日であつた。私はその時初めて佐藤君と相識つたのだ。その頃君はまだ佐藤要蔵と名乗つてゐた。その頃のくはしい日記も収められてゐる。それを読んで私は泣いた。君の墜落惨死したのは大正十年十一月三日であつた。そのうち私はゆる／＼君のおもひ出やら何やらを書いて見たく思つてゐる。(十月五日)

「寄贈書紹介」より

飛行詩人佐藤章(赤川菊村氏編)

往年千葉県津田沼に墜落惨死した飛行家佐藤章氏の遺稿、逸話を挿はさんだ伝記である。佐藤章氏の事については本誌第一号身辺雑記を参照されたい。(四六版五百三十頁、非売品、秋田県仙北郡金沢西根小学校内アキラ会発行)

御風は「おもひ出やら何やらを書いて見たく」としているが、筆者は現時点でそのような記述は見たことがない。なお、寄贈書として紹介のこの書籍は散逸したのか、御風遺品には含まれていない。

佐藤章が飛行機で糸魚川町を賑わせた大正六(一九一七)年は、諏訪神社裏の浜町から押上の西端まで五〇三棟を焼いた明治四十四年大火の六年後、また、御風が糸魚川へ帰住

して一年後、『大愚良寛』の出版前年、良寛研究で県内各地を訪問していた年である。

四 佐藤と御風(二)

『飛行詩人』に収録されている佐藤の稿には、御風との交流のみならず、飛行機の滑走路にもなるほどの広い砂浜、大火後の沈んだイメージを覆す糸魚川町民の大歓迎ぶり—なかでも寺町、押上住民の生き生きとした様子が詳細に描写されている。

佐藤が糸魚川に来た理由は、すなわち帝国飛行協会による「北陸三県連絡大飛行」のためである。これは同協会所属の後藤正雄が金沢を出発し、糸魚川で佐藤章にバトンタッチ、最終的に村上まで飛行するという行程(八月四日〜九月九日)の途中であり、冒頭の糸魚川町史年表の記事は、まさに後藤正雄が寺町浜に着陸した件を記したものであつた。さて、佐藤の糸魚川での足取りをまとめると次のとおりであり、十日の滞在である。

※書体を変えた箇所は佐藤の文章

大正六年

八月十八日 列車で糸魚川入り

八月十九日 富山県生地出発の飛行機を寺町浜で迎える。操縦を交替して佐藤が試験飛行するも離陸に失敗、海へ突つ込み飛行機が破損。この後、修理を終え無事に次の目的地に旅立つまで、佐藤は糸魚川町に滞在することになる。夕方、西頸城郡長ほかによる歓迎会に出席

八月二十二日 午後六時まで指物屋旅館まで来られたいと相馬御風先生のお使を受けただで行った。非常に親切な温厚な人である。自分は先生に就いては四五年前より多大の敬意を払って居たが今先生と接するを得親しくその主義抱負を聴いて益々崇拜の念を強めたのである。

八月二十三日 修理後の試験飛行。飛行は出来たが、今度は着地に失敗して再び故障。夕方、町有志による同情の慰労会に出席。その夜、部品調達で所沢へ。

八月二十六日 再び糸魚川入り。

午後七時頃御風先生が旅館に來られて先日願って置いた歌を書いて行かれた。誠に親切な人であるとしみじみ感じた。

八月二十八日 晩には御風先生と水沢北越新聞記者と柳沢主事と自分と四人でお馴染みの山の井亭に行つて痛飲した。座に待する者は皆糸魚川一流の美人だ。といつて軽蔑つてはならぬ。町は小さいけれど八十名の芸者を有する糸魚川の花柳界は又盛んなりと云ふべしである。酔の回るにつれて興湧き四人で唄つたり踊つたりした。

八月二十九日 修理された飛行機で直江津方面に出発。御風も見送りのため寺町浜へ。飛行場に来る途中御礼に回つた時「僕も後から行くから」と云はれた御風先生も見えられた。

この後、佐藤は直江津、次に柏崎へと飛行。柏崎の天屋旅館に滞在した際には、御風から

書簡が届いており、これも『飛行詩人』で紹介されている。

拝啓 着々美事なる御成功をおさめられつゝあることを衷心より奉慶賀候、過日來は誠に失礼のみ仕り申訳無之平に御海容願上候何卒時節柄の事にも候へば御撰養御大事にあそばされます〳〵御自重今回の御壯図をめでたく御完了の程切に〳〵祈り上げ居候、貴下を讃美するは人間の力そのものを讃美するに外ならずくれ〳〵も御自重の程奉祈上候 頓首

八月三十一日 糸魚川町 相馬御風 柏崎町天屋旅館方 佐藤要蔵殿

なお、村上までの飛行を終えた後の十月二十八日、糸魚川町の後援会は佐藤に銀牌(径二寸五分の純銀に黄金の発動機にプロペラを附せる美麗なるもの)を贈与したという。これが冒頭書簡中の「記念品」と思われる。

五 おわりに

紙面の都合で本文の紹介は別稿に譲るが、ほかにも『飛行詩人』には、糸魚川町や近郷からの二万人もの観衆、舟で沖から見物する者、料亭や芸妓の話、近藤甚兵衛の話、相撲、海水浴の話など、当時の町の様子が具体的にわかり面白い。また、大正五年に帰住して間もなくの時期の御風の動向を知ることの出来

る好資料であろう。



愛機アキラ号と佐藤章

平成二十九年 事業報告

□御風忌・総会・講話

平成二十九年五月八日 午後五時

会場 新潟県史跡 相馬御風宅

講話 榎 正喜様(文化振興課)

演題 糸魚川大火と御風

□会報「洗心」第二十七号発行

平成二十九年五月八日、六百部

□米吉忌(郷土の歌人・松倉米吉の法要)

平成二十九年十一月二十四日 午後六時

会場 正覚寺様

講話 山下佐保様(コスモス短歌会糸魚川

勉強会)

演題 松倉米吉 短歌鑑賞

□理事会(二回)

・平成二十九年九月十三日 午前十時

・平成三十年三月七日 午後一時半

□全国良寛会長岡大会参加(四名)
平成二十九年六月三日・四日
会場 アオーレ長岡ほか

□相馬御風顕彰ふるさと俳句大会への協力
賞品提供 児童生徒の部へ図書カード
平成二十九年十一月二十五日
会場 糸魚川地区公民館

【御風賞(最優秀賞) 作品の紹介】
一般の部

穂山 常男様(大阪府八尾市)

端居してあの世この世を眺めけり

小学生の部

藤岡 蓮様(南能生小学校5年)

初夏の夜ガイコツ動く凶工室

中学生の部

木島さやか様(糸魚川中学校2年)

バス停でえさを待つ雛つばめの巢

高校生

樋口 大輝様(糸魚川白嶺高等学校3年)

グローブの網目から見る夏の空

お悔み

御風顕彰に長い間ご尽力されたお二人が他
界されました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

■木島 登様 平成二十九年七月逝去
■石坂 茂様 平成三十年四月逝去

各種書籍のご案内

糸魚川市教育委員会から次の書籍が発行されて
います。いずれも相馬御風記念館(糸魚
川歴史民俗資料館)で販売しています。どう
ぞお買い求めください。

◇相馬御風書簡集 上・下

ともにA5判。上巻は家族(皓、文子、テ
ル、徳治郎)へ宛てた書簡を収録。下巻は諸
氏(学校や文学の道における恩師、先輩、同
輩、後輩、友人知人、幼馴染、そして良寛研
究における市井の協力者、さらに親戚、木蔭
会同人等)に宛てた書簡を収録。

◇相馬御風作詞楽譜集

A4判。平成十二年の初版に三曲を加えた
かたちでの出版です。収録作品は、春よ来い、
雪の日の小鳥、あられ、夏の雲、雲の峰、カ
チューシャの唄、初夏、ふるさと、春の雨、
糸魚川小唄、かなかな蝉、落葉、うちの燕の
全十三曲。七百年。

《表紙紹介》相馬御風筆「糸魚川小唄」

原稿用紙・ペン書

糸魚川歴史民俗資料館 所蔵

昭和十年十二月二十四日、大糸北線根知―
小滝間開通で糸魚川駅から小滝駅までが繋が

り、大糸線の全通機運が高まる。この動きを
見据え、糸魚川頭勝会(今でいう観光協会)
が観光客誘致に本腰をあげる。

頭勝会は糸魚川二業組合(芸妓組合と置屋
組合と思われる)とともに、「糸魚川小唄」
制定に乗り出し、御風に作詞依頼。その際、
御風は作曲を中山晋平、振付を藤蔭静枝にと
指名した。

糸魚川町は昭和三年と七年の大火で被災し
ており、その後復興計画を進め、昭和十一年
に一応の完了を見るに至った。八月、糸魚川
町復興並に糸魚川小学校増改築落成祝賀会が
あり、そこで「糸魚川小唄」が披露された。
歌詞に当地方のいいところ、特に「白馬」が
三回出てくるのは、大糸線利用での観光を意
識しているためであろう。なお、藤蔭の振付
はお座敷用であり、現在の振付は後年、藤間
流師範である故藤間千鶴(本名 白澤千鶴
子)が一般にも踊りやすい振付をという世の
要請に応え考案したものであり、長く市民な
らびに出身者に愛されているところである。
本年四月、有志により糸魚川小唄保存会が
結成された。ありがたいことである。

【編集・発行】

御風会(事務局・相馬御風記念館内)

千九四一・〇〇五六

新潟県糸魚川市一の宮一―二―二

電話番号 〇二五(五五二) 七四七一